

## 福祉文化雑感

### 「手話パフォーマーとろうあ村長」

関矢 秀幸(新潟福祉文化を考える会 前日本福祉文化学会理事)

新潟県長岡市出身の、ステージ・パフォーマー丸山浩路さんの体験手記です。それにしても感動的な出会いでしたね。丸山さんも、横尾さん(小黒村のろうあ村長)現上越市安塚区も既に鬼籍に入られています。この体験手記は、私が12年前に、仲間内で立ち上げたブログに投稿したものです。資料も散逸し、どこの資料から抜粋したのか不明ですが、ご容赦下さい。改めてお二人に敬意を表してご冥福をお祈りいたします。

#### (横尾村長との出会い)

「ダメらっ。切符も持たんで汽車に乗ろうとしてもダメらてえ。」越後訛り荒々しい男性の音が響いたのは、新潟県内を走る当時は国鉄と称し、黒煙吐く蒸気機関車に引っ張られて走っていた信越線の車内のことだった。時代は終戦直後の昭和20年代の前半。その怒声に乗客は一斉に声のするほうを見た。車掌が20代後半ぐらいの若い男性の襟首を掴んで、小突きまわしていた。男性はしきりに自分の耳を示して掌を顔の前で左右に振る。「そんげ耳の聞こえねえフリして同情してもらおうたって、オレはだまされねえ。いつもこの手で無賃乗車しているがろう。次の駅で交番に突き出してやるすけえ。」抵抗する男性をズルズル引き摺りながら近づいてきた。ちょうど小学一年生だった僕の横を通った瞬間、その男性は僕の前に座っていた紳士に向かって両手を激しく動かした。僕は本家である酒造りの瓶洗いやレット貼りのアルバイトをするために長岡から高田まで往復することがしばしばあったが、そんなときこの立派な紳士をよく目にしていた。50代前半の中肉中背、終戦直後にもかかわらず四季にふさわしいスーツを召し、べっ甲のフレームの眼鏡にソフト帽をかぶって、いつも読書している姿であった。僕は内心(ボクも大きくなったらこんな立派な大人になろう)と密かに憧れている“憧れの君”であった。襟首を捕まれていた若い男性はその憧れの君を目にすると身を乗り出すようにして両手を動かす。それまで車内の出来事に一瞥すらくれなかった紳士は本を閉じて静かに立ち上がり車掌の前に立った。そして静かに顔の前に右手を立てて(そんなことをしてはいけません)という風に左右に振った。それを見た車掌はさらに声高に「おめえも耳の聞こえねえフリしてしてんがか。オレは絶対ゆるさねえからなっ。」と言い放った。僕の憧れの君は手帳を出しながらなにやらスラスラと書いて静かに車掌の面前に出した。車掌は「なんだ！こりゃ…なに「この人は本当に聞こえません。切符を落と

してしまったので困っています。どうしたら良いか教えてあげてください。横尾義智。」荒々しく読み上げていって「よこお・よしとも？」驚いたように声を張り上げた。「あの横尾先生ですか。生まれつき耳も聞こえず話も出来ない先天性ろうあ御身でありながら、東頸城の小黒村の村長さんを12年間努められた…横尾義智先生ですか。」唇の動きを見て静かに頷いた憧れに君に向かって、車掌は突然最敬礼のポーズをとって「名誉です。本当に…本当にご尊敬申し上げていました。」最敬礼を続ける車掌を制して一件落着という次第。そのあと憧れの君は僕の前に立つと手帳に何か書き込んで目の前に差し出してくれた。そこには…「きみとは よくあいますね。これからは おともだちになりましょう」の一言。憧れの君から「おともだちになりましょう」のお言葉。「ハ…ハイッ」。それからだった。月に二、三度駅前の食堂で、駅の待合室で、ご一緒する車内で20年近く手話の手ほどきをしていただいたのが、丸山浩路の手話のルーツである。“運命は誰と出会ったかで決まる”のフレーズが心に鮮やかに蘇ります。

講演パフォーマー 丸山浩路 (NHK 手話ニュース担当)

(徳洲新聞 2007年11月4日 338号 8面 Talk on)

今週のゲスト丸山浩路さん

少年時代に出会った聾啞者の村長の言葉に感動

数々のテレビドラマの手話コーディネーターも務める丸山さんが、手話と出会ったのはわずか十歳の時だった。

～前段略～

——手話を始めたきっかけは何だったのですか。

丸山 最初に手話を教えてくれたのは、今から五十年以上も前、新潟の小黒村（現安塚町）の横尾義智さんという聾啞者の村長でした。少年時代、信越線の電車の中でよく会い、なぜか可愛がっていただいた。

——聾啞の方が村長さんだったのですか。

丸山 聾啞者で、政治の長に立ったのは世界でも横尾さんくらいではないでしょうか。三期十二年務めておられます。

——その村長さんと少年時代に出会って……。

丸山 印象に残っているのは、横尾さんが汽車の窓から日本海を指さして、「押し寄せて引き返す波の形はみんな違う。人間もあの波の形と同じで、みんな違って、みんないいのです。私は耳の聞こえない波の形をしている。それは恥ずかしいことではない」と語られたこと。私が十二歳の時ですが、この言葉には非常に大きな影響を受けました。

——意味深い言葉ですね。

丸山 講演でも、よくこの波の話をして。「数多くの人間がいても、あなたはあなただけの波の形を持っています。それなのに、どうして人と比べて落ち込むのか。自分に

与えられた波の形をまず『良し!』と受け止め、そこから始めよう」と。

——自分自身を受け入れろということですか。

丸山 そうですね。そして自分の中の一番いいところ、「オンリーワン」を磨いていくことが大事です。ナンバーワンは人が決める価値だけど、オンリーワンは自分自身が決めるもの。自分のオンリーワンを磨いて、自分を包む光にきなさいと若者に話すと、とても納得されますね。

～後段略～

### ◎横尾義智（よこお よしとも）氏プロフィール

明治 26 年 8 月、新潟県東頸城郡小黒村大字行野（現上越市安塚区行野）横尾義周の長男として生まれた。生まれつきろうあ者であったので、東京聾啞学校（現筑波大学付属聾学校）へ入学。昭和 9 年（41 歳）、村民に推され小黒村長に選出。

戦争協力で公職を追放されるまで 12 年間、人望厚く多難な村政の舵取りを行った。農地開放と社会事業に多額の支出をした後、行野の本邸を引き払い高田市（現上越市）西城町の別邸を本拠としたが、昭和 38 年 2 月に亡くなった。

（越佐人物誌、雪のまちかわらばんより）

### ◎丸山浩路（まるやま こうじ）氏プロフィール

1941 年新潟県生まれ。明治大学卒業後、心理セラピスト、手話通訳などの仕事に携わる。83 年からは「講演パフォーマー」として全国を回り大勢の人に語りかける活動を始める。テレビドラマ『愛していると言ってくれ』などの他に舞台、映画などで数多くの手話コーディネートを手がけている。主な著書は『本気で生きよう！ なにかが変わる』（大和書房）、『手話あいうえお』（NHK 出版）、『鈍行列車』（ダイナミックセラーズ出版）など。NHK 教育テレビ『手話ニュース 8 4 5』のキャスターとしても有名。2010 年 12 月に逝去された。

言葉は聞かせるだけでなく見せるもの

手話は感動を伝えられる

空気を動かす仕事がしたくて講演パフォーマーに

### セミナー予告(福祉文化番宣)

新潟福祉文化を考える会では、コロナが終息に向かい、全国の日本福祉文化学会の会員交流を夢みて、新潟県上越市安塚区での福祉文化セミナーを開催したいと燃えています。ろうあ村長と NPO 自然王国細野村、テーマ、研修は盛り沢山です。

全国の会員の皆様、福祉文化とは何か、新潟を会場に一步一步進めていきましょう。

詳細は近日公開できれば・・・(コロナ終息を目指して)